〈コメント〉

ジェンダー研究の射程と課題

大貫敦子

弓削さん，玉川さんともに，宮廷社会から市民社会への移行，および初期市民社会をテーマとし，この時期のジェンダー編成を，市民社会に固有の特性として見ている点で共通している。また，啓蒙期に出てくる「自然」の考え方と，ジェンダー秩序の再編成とを繋げている点でも共通している。２つの発表は時代的に接合しながら，弓削さんは男性性のジェンダー，玉川さんは女性性に着目していて，２つの発表が相互に別の観点から同じ問題を照射している点で非常に興味深い。

しかし，２人の発表に言われているように，市民社会，あるいは市民階級的価値観（自然や主体）が，その前の時代とはっきりと区別されるものと断定できるのかどうか。つまり市民社会＝近代という図式を，はたしてどこまで主張できるのかを問いたい。

たとえば，ノルベルト・エリアスは『宮廷社会』（Norbert Elias, *Die höfische Gesellschaft*. F. a. M., 1969）で，むしろ近代的思考の産物とされる合理性の思考，あるいはそれへの反発としての感情の解放は，すでに17世紀フランス，そして18世紀ドイツの宮廷のなかに生じてきたという見方をしている。絶対主義の高度な官僚制のなかで，一定の合理主義はすでに始まっていて，またその合理主義への反発として感情の解放も宮廷社会のなかから生じてきたという見方である。エリアスは次のように述べている。「通常，啓蒙と呼び習わしている17，18世紀のあの知的合理主義も，決して単に有職市民的・資本主義的合理性との関連のなかだけで理解されるべきではなく，それには宮廷的合理性からの太い連絡路が何本も通じていたという事実である」。

もちろんエリアスは，宮廷社会での合理性はエリートたちの間に生じるという点で，市民階級のそれとは違うとはしているが，思考パターンの発生に関しては，近代をその前の時代との断絶で見ることを疑問視している。またルーマンも（Niklas Luhmann, *Gesellschaftsstruktur und Semantik*. F. a. M., 1980 – 95），近代の特性とされるターム（たとえば個人や主体）も，その思考の萌芽は宮廷社会に始まるとしている。

私自身としては，近代を宮廷社会との明確な断絶として捉えることには，多少問題があると考えている。一例をあげれば，18世紀末から19世紀初頭のドイツにおけるサロン文化の場合，必ずしも宮廷社会との断絶では捉えられない面がある。周知のようにドイツのサロン文化は，フランス宮廷社会に範をとったものだが，ドイツ

においては市民階級がその担い手となったことで，宮廷社会におけるサロンとは別の要素を持つようになる。しかしこのサロンには，貴族階級も出入りしていたし，市民階級と貴族階級との明確な線引きをすることには無理がある。さらに「近代」という時代概念そのものが，後に構築されたものであることを考慮すべきだと考える。その意味では，むしろ「近代」あるいは「市民社会」という概念構築がはらむ問題性を再検討するような視点を，ジェンダー論から提供することが必要であると思う。

もうひとつは，過去の時代をジェンダーから再検討する研究の成果を，どのように現在の分析につなげるかという問題である。特に最近のバックラッシュ現象の強まりを考えた時に，ジェンダー研究が何をなしうるかという問題である。たしかに「女性」に焦点をあてたジェンダー研究は，それまでの歴史研究のジェンダー・バイアスを指摘してきた功績がある。しかし最近の状況を見ると，バックラッシュの強さを感じざるをえない。私的なことだが，この10年ほど，大学でジェンダーに関する連続講演を行っていて，歴史をジェンダーから問い直すというテーマで多くの方に講演をしてもらった。10年前とここ数年とでは，学生の反応に大きな違いが見られる。女性が音楽史にしても，美術史にしても取りあげられてこなかった問題や，女性が不利な立場にあったことなどを聞くと，最近の学生は（女性を含めて），むしろ嫌悪感を強く見せる。もう「かわいそうな女性たち」の話は聞きたくない，という反応である。また東京都教育委員会の，皮肉な意味での「成果」なのか，「ジェンダー」という言葉そのものに，危険思想というイメージを持つ学生も多くなった。このような若い世代にも浸透しているバックラッシュ現象のなかで，ジェンダー研究を教育現場に繋げる可能性について，お二人がどのようにお考えかをお聞きしたい。

（おおぬき　あつこ・学習院大学）